

数の増加が著しい。特に食道切除再建術はここ1年で大きな変化を遂げた。昨年9月に他院の事例を参考に、イーザーマットを使用し、半腹臥位での手術を行なった。だが、医師、看護師ともに初めての試みであり、体位固定までに時間を要した。又、表皮剥離などの皮膚トラブルもあり、イーザーマットの使用は容易ではなく、多くの問題点があった。そこで、医師と看護師が協力し、完全腹臥位による鏡視下食道切除再建術に取り組み始めた。腹臥位は体位固定に要する時間の短縮、皮膚トラブルの軽減を図ることができ、多くのメリットがあることが分かった。現在もまだ試行錯誤の段階ではあるがこれまでの取り組みをまとめて報告する。

## 7 腹腔鏡下大腸癌手術における開腹創延長症例の検討

植木 匡・多々 孝・石塚 大  
若桑 隆二・八木 寛  
刈羽郡総合病院外科

【はじめに】最近、当院では開腹創を4 cmとしているが創の延長が必要な症例がありその要因につき検討した。

【対象と方法】技術的に安定し始めた2008年以降の51から100例目を対象とした。開腹創は4 cmから1 cmずつ切開を延長し、8 cm以上は術後測定した。開腹創4 cmを標準とし、5と6 cmを延長群、7 cm以上を開腹移行群とした。

【結果】各々、29例(58%)、15例(30%)、6例(12%)であった。対象の男女比は27:23であった。延長群は、男性の44%(12例)、女性の13%(3例)であった。横行と下行結腸手術の50%以上が延長群であった。延長要因は、腸間膜脂肪過多が5例、腫瘍関連が4例、技術関連が6例であった。脂肪過多は全例男で、2例のBMIは適正であった。

【結語】腸管を取り出すときに創延長を必要とする症例は男性が多かった。技術的要因は減少をめざしていく必要がある。

## 8 腹腔鏡下に摘出した直腸癌 Miles' 手術後、216 番リンパ節転移の1例

畠山 悟・小林 孝・金子 和弘  
新潟臨港病院外科

症例は56歳、男性。2006年1月直腸癌に対し従来の開腹法によりMiles'手術D2施行した。2型, mod, a2, n2, stage III bであった。TS-1による術後補助化学療法中の2007年10月に216番リンパ節転移を指摘され、mFOLFOX6を11クール、FOLFIRIを4クール施行しPRの判定となったが、その後引き続き7クール施行したものの、更なる縮小は認めなかった。CTおよびPET施行し、他部位に再発を認めなかったため、2008年12月に腹腔鏡下リンパ節摘出術を施行した。術後経過良好で5病日に退院した。病理結果は中分化腺癌で、組織学的効果判定はGrade 1aであった。Miles'手術後であっても術前超音波検査で腹壁と腸管との癒着が無くポートを挿入できる部位が確認できれば腹腔鏡手術は安全に開始でき、腹腔内臓器の癒着の程度によっては低侵襲で、容易に216番リンパ節の摘出も可能である。

## 9 当科における腹腔鏡下大腸切除術の現況

長谷川 潤・市川 寛・渡邊 隆興  
岩谷 昭・清水 孝王・島影 尚弘  
田島 健三

長岡赤十字病院外科

【はじめに】当科における腹腔鏡下大腸切除術がようやく50例を超えるにいたり現状を把握し今後に向けての問題点を明確にするために2006年4月から2009年5月までに行われた52例(虫垂切除術は除く)について検討した。

【症例についての現況】症例数52例、平均年齢58.4歳

疾患:大腸癌46例、良性疾患6例 大腸癌の進行度 0/I/II/IIIa/IIIb/IV:11/16/5/8/3/3, 占拠部位 C/A/T/D/S/RS/Ra/Rb:3/13/5/2/8/7/4/3

手術時間:全症例の平均時間275.5±84.5分、腹腔鏡下手術完遂例:273.3±85.8分で有意差はなかった。前期症例、後期症例に分けた場合、手

術時間に短縮は見られなかった。開腹移行例は6例で11.5%であった。術後早期合併症は比較的小さいと思われたが、手術時間が長く短縮されておらず、手順の見直し等検討が必要と考えられた。

## 10 NOSE (natural orifice specimen extraction) を用いた完全鏡視下 S 状結腸切除術の試み

西村 淳・河内 保之・牧野 成人  
川原聖佳子・北見 智恵・森本 悠太  
加納 陽介・新国 恵也

厚生連長岡中央総合病院  
消化器病センター外科

腹腔鏡下大腸癌手術 (LAC) は開腹手術より低侵襲であるとの研究結果が多く報告されている。近年は、さらなる低侵襲化を目指し、NOTES (natural orifice transluminal endoscopic surgery) の研究が進められているが、一般での臨床応用にはまだ時間がかかる。これまでの LAC では、標本を摘出するための小開腹創が必要であり、創痛、創感染、ヘルニアなどの合併症が、低侵襲性を損なう場合が見られた。最近は標本を経肛門的、経腔的に摘出して、これらの小開腹創に起因する合併症を減らし、より低侵襲を目指す術式が報告されている。当院でも、S 状結腸癌+胆嚢結石に対して、標本を経肛門的に摘出する NOSE を行ったので、ビデオを含めて供覧する。また、この術式の問題点などにつき、文献的考察を交えて考えてみたい。

## 11 腹腔鏡補助下胃切除術における肝挙上法についての検討

松木 淳・小杉 伸一・矢島 和人  
中野 雅人・島田 哲也・鱈 陽介  
神田 達夫・畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科

腹腔鏡補助下胃切除術では、尾側から頭側に見上げる視野が基本となるが、胃小彎側及び腹腔動脈幹周囲、横隔膜脚周囲の操作のためには肝臓の

十分な展開が不可欠である。当科では従来、肝円索に糸を刺通し、剣状突起下の腹壁に挙上して肝下面を展開していたが、肝左葉の形態によっては展開が不十分となり、術野確保のための追加ポートを必要とした。種々の鉗子を用いて肝左葉を挙上し良視野を得ることが可能であるが、助手の手を必要とすること、また鉗子が腹腔鏡や他のデバイスと近接し干渉することがあるという欠点があった。今回、フック型リバーリトラクターを導入し、良好な術野展開を得たので報告する。

## 12 当科での腹腔鏡下鼠径ヘルニア手術 (LPEC) について

大滝 雅博・佐藤 良平・大橋 優智\*  
小島伸一郎\*・二瓶 幸栄\*・鈴木 聡\*  
三科 武\*

鶴岡市立荘内病院 小児外科  
同 外科\*

【緒言】当科では2007年より女兒鼠径ヘルニアに対し腹腔鏡下鼠径ヘルニア手術を導入した。原則として Potts' 法と本法の両方について①入院期間②費用③手術創などにつき十分に説明し家族の同意が得られた症例に対し施行している。

【検討】現在までに14例の女兒症例を経験した。①入院期間は Potts' 法と変わらず②費用は約5万円の増加となるものの乳児医療を使用することで、6歳未満の幼児では2泊3日の入院費用が1500-5000円の自己負担となった。このため6歳未満の患児家族は、6歳以上の症例に比べ LPEC 法を好んで選択する傾向を示した。③手術創は家族におおむね良好であった。

【結論】女兒鼠径ヘルニアに対する LPEC 法は当科の標準術式として今後も継続する予定である。対して男児鼠径ヘルニアにおいてはまだ課題も多く今後も導入を慎重に検討したい。